

ロールレタリングを用いた教育による看護学生の共感性の変容

金子 周平¹、關戸 啓子²、下村 明子³

¹鳥取大学大学院医学系研究科、
²徳島大学医学部保健学科、³梅花女子大学看護学部看護学科

【目的】

共感的アプローチは患者の不安軽減、痛みのマネジメント、慢性疾患の適応等と関係する (Kirk, 2007) が、看護学生に共感的理解は身につけにくい (Price et al, 1997) と言われる。本研究ではロールレタリング (RL) のイメージを用いた技法による看護学生の共感性の変容について、心理尺度を用いて客観的に検証することを目的とする。

【方法】

A・B 大学一年次看護学生 149 名の内、研究参加に合意しデータ欠損のない 118 名 (男性 16 名、女性 102 名、平均 18.84 才) を対象とした。2 回の授業で 3 つのモデル事例 (採血に抵抗する 70 代女性等) の提示後、看護師と患者の立場からメッセージを書く RL (下村, 2001; 關戸, 2003) と小グループでの話し合いを実施した。イメージを用いた技法では「想像活動への関与」の程度を考慮し、また共感性の多次元性 (Davis, 1994) も重要であるため、想像活動への関与尺度 (III 尺度: 笠井ら, 1993) を授業前、多次元共感性尺度 (MES; 被影響性、他者指向的反応、想像性、視点取得、自己指向的反応の 5 因子; 鈴木ら, 2008) を授業前後 (pre, post) に測定した。倫理的配慮として、対象者には研究趣旨、自由意志による参加決定の保証、成績との無関係性、学会発表を行うこと等を説明し、同意した対象者のデータは個人を特定せず無作為番号で管理した。

【結果】

III 尺度の平均で高低群 (H,L) に分け、MES について 2 (H,L) × 2 (pre,post) の分散分析を行った。MES 合計では交互作用 F (1, 116) = 4.23, p < .05, MSe=13.61 がみられ、pre (p < .01) でも post (p < .10) でも H が高く、また H は post で低下した (p < .01)。「被影響性」では、時期の主効果 F (1, 116) = 6.51, p < .05, MSe=2.58 がみられ、post で得点が低下した。「他者指向的反応」では交互作用 F (1, 116) = 9.01, p < .01, MSe=1.56 がみられ、H で得点が低下した (p < .01)。「想像性」では群の主効果 F (1, 116) = 17.23, p < .01, MSe=27.50 がみられ、H が高かった。「視点取得」では有意差なし。「自己指向的反応」では時期の主効果 F (1, 116) = 3.57, p < .10, MSe=1.44 がみられ、post で得点が低下した。

【考察】

イメージに深く没入できた群で MES 合計、「他者指向的反応」の得点が低下したことから、1) 他者の視点に立った共感的理解の向上には至らなかったこと、2) 自分の共感性を楽観的に捉えない (現実的な) 状態になったこと、3) 患者理解への負担を多少なりとも感じたことが示唆される。ここから RL には時間をかけ学生の自信喪失や負担感を共有しながら取り組む必要があると言えよう。一方「被影響性」や「自己指向的反応」の低下から、自身が巻き込まれない「自他の区別 (角田, 1998)」は進んだと言える。また「想像性」や「視点取得」は変化せず、認知的側面の変容には影響を及ぼさないことも示された。

第3回日本看護科学学会
学術集会講演要集, 453

ナラティブ教材を用いた精神看護学授業での統合失調症のイメージの変化のテキストマイニング分析

小平 朋江¹、いとう たけひこ²

¹聖隷クリストファー大学看護学部看護学科、²和光大学

【目的】

精神看護学の授業において、統合失調症の単元の授業前 (第 1 回) と授業途中 (第 2 回) と全体授業終了時期 (第 3 回) の感想文の分析で学生が統合失調症の病いの体験をどのように受け止めたか、すなわちナラティブ教材に対する効果の特徴を明らかにする。感想文やイメージの記述という学生のナラティブを客観的・量的に測定することを本研究では試みた。

【方法】

研究協力者:看護大学 2 年生、「精神看護学」授業受講者。有効回答数は、第 1 回 120 人、第 2 回 94 人、第 3 回 86 (うち、イメージを書いた人は 75 人) 人であった。調査の実施第 1 回は 2010 年 10 月 27 日、第 2 回は 2010 年 11 月 4 日、第 3 回は 2011 年 1 月 13 日に実施した。分析手続き: (1) 感想文を、テキストファイルとして入力した。(2) それらをタブ区切りデータに変換した。(3) それを、Text Mining Studio で読み込んだ。

【倫理的配慮】

聖隷クリストファー大学倫理委員会の審査を経て実施した。

【結果】

第 1 回の特徴語は、「幻聴」「聞こえる」「感じ」「見える」「恐い」「見えない」「ストレス」「関わる + したくない」「聴こえる」「病む」が上位単語であった。第 2 回の特徴語は、「患者さん」「日常生活」「急性期」「慢性期」「閉じこもる」「暴れる」「できる + ない」「理由」「会話 + できる」「送る」が上位単語であった。「急性期」と「慢性期」はその間の講義内容の反映でもある。第 3 回の特徴語は、「100 人」「おこりうる」「表われる」「孤独」「陽性症状」「身近」「病気」「妄想」「おさえる」「たたかう」が上位単語であった。

【考察】

ナラティブ教材が学生の精神障害をもつ人に対するイメージを変化させ、間接的経験ができる意義が分かった。

表1 特徴語分析の結果 (指標値は χ^2 乗値)

第 1 回				第 2 回				第 3 回			
単語	品詞	回数	指標値	単語	品詞	回数	指標値	単語	品詞	回数	指標値
1	作態	40	646.030	1	患者さん	3	11	100人	名詞	4	11
2	感じ	14	91.0283	2	日常生活	9	11	おこりうる	動詞	3	3
3	恐い	14	19	3	急性期	5	5	表われる	動詞	3	3
4	見える	14	19	4	慢性期	5	5	理由	名詞	6	9
5	聞こえる	14	19	5	関わる	7	7	送る	動詞	4	5
6	病む	14	19	6	できる+ない	4	4	暴れる	動詞	4	5
7	ストレス	29	47	7	理由	7	10	身近	名詞	5	7
8	聞こえない	10	13	8	妄想	7	10	孤独	名詞	18	4
9	自分	4	5	9	病気	7	10	陽性症状	名詞	18	4
10	関わる	4	5	10	急性期	3	3	おさえる	動詞	2	2
11	想像性	4	5	11	慢性期	3	3	たたかう	動詞	2	2
12	視点取得	4	5	12	閉じこもる	3	3	妄想	名詞	2	2
13	他者指向的	4	5	13	送る	3	3	病い	名詞	2	2
14	自己指向的	4	5	14	理由	4	6	幻聴	名詞	2	2
15	現実性	7	9	15	暴れる	2	2	病気	名詞	2	2
16	想像活動	5	6	16	できる+ない	2	2	病い	名詞	2	2
17	現実性	3	4	17	理由	2	2	病い	名詞	2	2
18	病	3	4	18	理由	2	2	病い	名詞	2	2
19	病い	3	4	19	理由	2	2	病い	名詞	2	2
20	病い	3	4	20	理由	2	2	病い	名詞	2	2
21	病い	3	4	21	理由	2	2	病い	名詞	2	2
22	病い	3	4	22	理由	2	2	病い	名詞	2	2
23	病い	3	4	23	理由	2	2	病い	名詞	2	2
24	病い	3	4	24	理由	2	2	病い	名詞	2	2
25	病い	3	4	25	理由	2	2	病い	名詞	2	2
26	病い	3	4	26	理由	2	2	病い	名詞	2	2
27	病い	3	4	27	理由	2	2	病い	名詞	2	2
28	病い	3	4	28	理由	2	2	病い	名詞	2	2
29	病い	3	4	29	理由	2	2	病い	名詞	2	2
30	病い	3	4	30	理由	2	2	病い	名詞	2	2

一般示説 (12月3日)